

REVERIE

こんな夢を見た。
真昼間に、ベッドで眠り込んでいたら僕が迷い込んでしまったこの場所では、誰かの葬式が行われている。
あたり一面白い花で被われた部屋の正面に、棺が据えられて、部屋の両側には、真中に通路を開けて30人ばかりの人々が俯きうなだれているのが見える。誰の葬式なのだろう。皆悲しそうな顔を装っているのだろうか。いや、本当に涙ぐんでいる人もいるようだ。それにしても、ここはなんととも言えずいい気持ちだ。
天国のように美しい光と、花の香りに包まれている。
ふわふわとして宙を泳ぐみたいに体が軽くて、花の香りの上を歩いているみたいで、こんな不思議ないい気持ちになったのは、生まれてはじめてだ。
しかし……ここは、何かが変だ。そうか、よく見ると、なにもかもが透けて見えている。花に被われた祭壇。花に被われた棺。そしてその中に横たわる遺体。
なにもかもが、透けて見えている。透明な花、透明な祭壇、透明な棺……透明な……あの棺の中に居るのは誰なんだろう。確かに見えている。確かに見えているのに……なにもかもが透けてしまっている。いったい、これはどうしたことだろう……
こんなことにどうして誰も気づかないのだろうか。ああ！この人達も透明なのだ。なにもかもが透き通って……なんて不思議な美しい光景なのだろう。
この人達はいったい何を考えているのかな。僕のことが見えるのかしら？
いや、どうも見えてないようだ。誰もこちらを気にすることもなく、黙々と順序良く焼香をすませていく。本当に誰からも僕のことが見えていないようだ。
誰が死んだのだろう。祭壇の写真までが透き通ってしまって何だかよくわからない。
待てよ。今僕が誰からも見えていないっていうことは……もしかしたら、本当に透明になってしまったのは、この僕のほうなのかもしれないな。
そう言えば、このところ鏡に映った自分の姿がよく見えなくて事があった。近頃、体の調子が悪くて目がかすむせいだとばかり思っていたけれど……この前街で妹と並んでショーウィンドウの前に立ったときも、ガラスに映っていたのはあいつだけだった。あの時は特に気にもかけなかったけれど……
ということは、本当は僕はその時そこに居なかったのかな？僕はいったい今までどこにいたのだろうか？ さっきは確かに自分の部屋のベッドで眠っていたはずだ。なのに……

そうか、これは夢だ。そうに違いない。だからも姿が見えないなんて、夢を見ていたのに違いない。きつと、そうだ。
僕だけが鏡にも、ガラスにも映らないなんてことが、あるはずがない。
ああ、あの花に埋もれた祭壇の写真の額にガラスが入っている。
あそこに映してみよう。きつと僕の姿が映るに違いない……
……きつと、映るに違いない……僕の顔が……

internet

ミルクホールタイムスは、インターネットのホームページに掲載しております。メッセージボードも開設しておりますので、ご意見や、ご感想、身近な興味深い情報などお寄せください。

<http://www.milkhall.co.jp/>

何をするのかと思って見ていると、私の食べているおにぎりを反対側からかじりついて食べ始めたのです。
おにぎりとして変わらない大きさの子猫ですよ。見上げた根性です。プチでもトラでもない、耳と顔と足の先の黒い猫。どんな名前にしようかとさんざん話し合った結果、子猫の名前は「グーニー」
今も小さな悪魔みたいな顔で見上げています。 to be continued



H.M.A.T.I.S.S.E 52

COLUMN

鎌倉の猫事情 第八話

こちら鎌倉では、皆が子猫が到着するのを楽しみに待っています。準備万端。といっても、ただ待っているだけで、犬と違って猫には手を掛けられないものです。日曜日をつぶして犬小屋を作ったり、アーチ型の入り口に名前をペンキで書いてやるなんて事はしません。猫にはなーんにもしません。トイレだって少し大きくなってヨクヨク歩けるようになったらお尻を叩いて窓から出してやれば、ちゃんと按配のいい場所を見つけてすませてきます。ところが近頃では、一年中土がじめじめとして猫にとって好都合な昔ながらの縁の下がある家が減ってしまい、道端にも家にも土の地面が見えないのですから、先代のシュガーちゃんもそこところは苦労したようです。少し前には地面だった所がコンクリートで固められてしまい、そこで何とか自分のウンチを隠そうと硬いコンクリートを前足の爪で懸命に引っ掻いているのを見かけたことがありました。無駄な感じはなんとなくわかるでしょうが、本能には勝てないものなのでしょう。その姿を思い出して、今回は猫用のトイレだけは用意することにしました。子猫用のプラスチック製のものと、燃えるゴミになるという袋入りの砂、これを台所の隅に置いて、と……さあ、これで準備万端です。
子猫の敵になり得る近所の悪猫どもの所在も確かめましたが、今では第一話に登場した耳にかざざのある白猫や、お隣との境の塀の上で若さを誇っていた鯖猫や、ミルクホールの少し先の路地に集まって夜中の会合をしていた猫達は、最近見かけなくなりました。みんな死んでしまったのでしょうか？ 明け方に群れをなして商店街を襲っていた真っ黒なカラス達も、近頃鳴りをひそめているようです。商店会で苦心して、あちこちに取り付けた新式のカラス除けが効いたとも思えないのですが、子育てか何かの関係でしょうか、近頃この境界の朝はいたって平和で、子猫がうっかり顔を出してもそれ程危険はなさそうです。
さて、ミルクホールのトラックは、耳の黒い子猫を乗せて鎌倉へと走っています。なんと小さいことでしょうか。朝方さん泣きわめいて疲れてしまったと見えて、左の手の平の中にすっぽりと納まり、指の股に顔を埋めてすやすやと眠っています。子猫の里親の古田さんの話では、まだミルクを飲んでいますが、よく見たら歯も生えてきているようだから、もうご飯あげても大丈夫。ということです。こちらもおなかが減って来ました。子猫が寝ているうちに、コンビニで買っておいたおにぎりを片手でそとむいて食べることにしました。そうすると、眠っていたはずの子猫が、むくっと起き上がり、私の腕をつたって這い上がってきます。

